

飼料用米「夢あおば」栽培ごよみ（稚苗移植）

茨城県農業再生協議会
令和6年1月作成
(監修) 茨城県農業総合センター

時期	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月								
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下						
作業	耕起			播種準備			催芽 播種			施肥・代かき 移植			除草剤 散布			穂肥			病虫害防除			収穫			乾燥 調製			土づくり		
生育ステージ (5月下旬移植)				● 出芽 播種			○ 2.2 ~2.5 葉期 移植			▲ 活着期			△ 分げつ期			△ 幼穂 形成期 穂肥			◎ 出穂期			(登熟期)			● 成熟期			● 収穫期→立毛乾燥		
水管理				入水			浅水 (活着・分げつ促進)			中干し			間断かんがい			落水														

- ・堆肥の施用
- ・稲わらのすき込み
- ・耕深15cm以上の確保

収量・品質目標

粗玄米収量	680kg/10a
玄米水分	15.0%以下

品種特性

品種名	早晚性	草型	移植期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	収量 (kg/10a)	千粒重 (g)	耐倒 伏性	耐病性		脱粒性	穂発 芽性
										縞葉 枯病	葉い もち		
夢あおば	早生	穂重	5.22	8.01	9.24	91	783	25.2	強	抵抗性	強	やや 難	中
コシヒカリ	中生	中間	5.07	7.25	9.03	92	592	21.5	弱	罹病性	弱	難	難

試験データ: 茨城県農業総合センター農業研究所水田利用研究室(龍ヶ崎市大徳町)平成26年~29年成績による。
「夢あおば」は多肥栽培・遅植え、「コシヒカリ」は一般栽培・適期植えの結果。

コンタミ防止と収量確保のポイント

1. コンタミ防止のため、主食用米と収穫~調製作業が重ならない範囲で早めに移植を行い、良好な条件下で登熟させる。
2. 地力の低い圃場への作付けや、極端な疎植栽培は避ける。
3. 障害型冷害に弱いため、移植期が前進しすぎないようにする。
4. 必要に応じて病虫害の防除に努める。
(ヒメトビウンカ、イネツトムシ、斑点米カメムシ類)

●施肥

- ・総窒素量(基肥分+穂肥分)は「コシヒカリ」栽培のプラス5~6kg程度、穂肥重点の施肥体系とする。
- ・穂肥は倒伏防止のため、出穂前20日頃(幼穂長3~5mm)に施用する。
- 【例】窒素施肥量10kgの場合: 基肥7kg+穂肥3kg、堆肥を利用する際には、その分基肥を削減する。
- ・リン酸およびカリ含量が十分な圃場では、基肥に低PK肥料、穂肥に硫安等を利用してコスト削減を図る。(ただし、連年栽培による地力の低下に十分注意する)
- ・全量基肥肥料は早生用を使用し、分施肥体系の総窒素量から10%程度減肥する(側条施肥では20%減肥)。

●田植え

- ・5月中の移植が望ましい。それ以降になると収量が低下し、倒伏しやすくなる。
- ・株間は18~22cm、株当たり4~5本植え、植付け深度は2~3cm。

●水管理

- ・2~3cmの浅水で活着・分げつを促す。
- ・有効茎を確保したら中干しを行い、その後は間断かんがいとする。
- ・落水は出穂期後30日以降、用水が早期に止まる場合には直前に溜めておく。

●種子の準備 (種子量: 10a当たり3~3.5kg)

- ・種子消毒の有無を確認し、必要に応じて薬剤や温湯消毒(60℃・10分)により種子伝染性病害の防除を行う。

●育苗

- ・5月上旬移植までは20~24日間、5月中旬以降の移植では15~18日間を基準に播種を行う。目標とする葉齢は2.2~2.5葉。
- ①浸種・催芽
 - ・浸種水温10~15℃(低水温は出芽不良を起こしやすい)
 - ・積算温度60~80℃(主食用品種より短い)
 - ・催芽は28~30℃でハトムネ状態にする。
- ②播種
 - ・大粒品種のため、一箱当たりの播種量は乾籾で190g程度とし、適正な苗立ち数を確保する。
 - ・10a当たりの移植に必要な苗箱数は15~18箱
- ③播種後の管理
 - ・温度、灌水は主食用品種に準ずるが、低水温のかん水に注意。
 - ・もみ枯細菌病が発生しやすい30℃を超える高温を避ける。

●収穫適期

- ・コンバインへの負担が大きいので、走行速度を控えるか、刈り取り条数を減らすなど、生育量に合わせて作業する。
- ・収穫適期は、穂首近くに緑色を残した籾が穂全体の10%程度になった頃以降。
- ・立毛乾燥を行い、主食用米との作業調整と乾燥コストの削減を図る。(倒伏、穂発芽、鳥害等に注意する)
- ・採種時は、籾水分25%以下、回転数を15%程度落として収穫する。

●乾燥・調製

- ・品質を考慮しないため、温度設定をやや高めにして乾燥効率を上げることも可能。(契約先の品質規格に注意)
- ・保存性を高めるため、仕上げの玄米水分は15.0%以下。
- ・大粒品種のため、籾摺りする際はロール開度を調整する。
- ・種子は専用モードで乾燥し、籾水分14.5%以下にする。

●出穂後の農薬使用に対する注意点

- ・出穂以降(圃場において出穂した個体が始めて確認される時点以降)に農薬を使用する際は、籾摺りをして玄米で給餌する。ただし、この措置を要しない農薬を用いた場合には、籾米もしくは籾殻を含めた家畜への給餌が可能である。